

特集

④

なれるか里山の救世主。

NPO法人なもし開縁隊 理事長 門屋 哲朗 (松山市)



愛媛県東温市河之内。道後平野の上部にある比較的規模の大きな谷津田地域である。日本の原風景、所謂棚田が広がる地だ。圃場整備もなされていない条件不利地の典型でもある。ご多分に洩れず農家の高齢化が急速に進行している。後継者の問題も極めて深刻な状況にある。あと5年もすれば耕作不能な田畑が一気に増えるだろう。

この地において「里山のお米づくりプロジェクト」が始まって、あつという間に7年が過ぎた。

プロジェクトを開始する前の調査準備期間を含めると8年である。当初のプロジェクトの目的は極めて単純なものであった。「耕作放棄地の解消」と「農地の維持」そして「里山の



済美高校食物科学コース特別講義



済美高校食物科学コース圃場研修・田植え



済美平成第4学年圃場研修学習・田植え



済美平成中等教育学校圃場研修・稲刈り

環境保全」。そのための方法として、お米づくり主体の「市民農園」が計画された。広く一般市民から参加者を有料募集し、地元農家さんの指導のもと市民自らお米づくりを楽しんでもらおうという事業だ。農地の管理経費は、参加料によって賄われる仕組みである。

2年目には、松山大学経済学部とのゼミ生が経済の研究とキャリア研修を目的に、済美平成中等教育学校第4学年生徒(高校1年生)が総合学習の場としてプロジェクトに参加。2012年から済美高校食物科学コースの生徒全員が、キャリア研修と食育を目的に水利権の切れた田んぼを活用した「里山の小麦づくり」に参加。2015年よりお米づくりにチャレンジしている。現在、なもし開縁隊で管理する圃場面積は約5反。そのほとんどが教育機関の研修学習の場として占めるようになった。

近代日本の指導的人物の言葉がある。「学生は小さな安定に満足してはならない。粗衣、粗食、寒暑に耐え、米をまき、薪を割り、それでも学問はできるのであ



最高学府の創立者の言葉だ。7年間の圃場の管理運営と学生・生徒達の教育研修指導を通して、私自身もこの言葉が持つ深い意味を理解できつつあるように思える。まさに私自身が彼らと共に現在進行形で学んでいるのだ。

プロジェクトを始めてから今まで、とにかく試行錯誤の連続。まず最初に感じたことは、田植えや稲刈りの体験イベント的なプログラムではなんの勉強にもならないということであった。里山には学ぶべき事柄が山のようにある。たとえば、日本の歴史・文化について、経済の仕組みについて、政治・政策とはなにか、環境保全の必要性とは、地球温暖化の原因と影響、食とはなにか、生命とはなにか、生物多様性の本質、水の価値、農業を含む産業のあり方、農地保全の意味、

る。「このうちの幾つかは、現代の学生・生徒あるいは教育システムには当てはまらないかもしれない。しかし、わが国において多くの先輩を輩出した

仕事はなんのためにあるのか、そして、人はなぜ学ばなければならないのか：などなど、まさに宝の山。それらを里山での実体験をもとに、如何に伝え学んでもらうか、最初の数年間は実験的試みの繰り返しであった。プログラムを作り、実践し、問題点を関係する方々と検証し、そして改良を加えていく。その間、私も必死に勉強を重ねていった。もちろんそれだけの専門家の知識や経験には遥かに及ばないが、それでもすべての事象は深く繋がっている：という程度は理解できるようになったと思う。

昨年作成した実践プログラムをもって、やつと研修の基本形が出来上がったと感じている。俗に「石の上にも三年」と謂われるが、その倍も時間を要してしまった。なんとも情けない次第である。それでも里山での学習、研修、研究活動は、参加する若者たちに、実体験に裏打ちされた幅広い知識と応用力、適応力、考える力を開花させるきっかけになっている。少なくとも「農」の持つ本質的な意味を理解することができるようになる。河之内の里山からは、もうすでに1,000名近い若



松山大学・済美高校食物科学コース合同研修

可能だと考えている。陳腐なネーミングだが「里山学園」あるいは「里山学習公園」みたいな姿だ。それには、若者だけでなく一般市民も気軽に参加できる仕組みづくりが必要であり、運営母体には、大学やJA、社会貢献を標榜する企業など社会的キャラクターのある団体が参画するべきであろう。

者を送り出している。実践で学んだ知識を生かし、将来のオピニオンリーダーに成長してくれることを切に願うものである。

全国的に耕作放棄が進む我が国の農業の現状。一口に農地の保全といっても地域によって、これまた様々に事情が異なる。こと河之内のような中山間地となると話は別物だ。条件不利地といわれる里山には学びの資源が山のごとく眠っているのである。それらを掘り起こし、磨き上げ、活用することが我々の責務だ。これまでの活動経験から、中山間地の農地保全については、「農業」から「業」を取り払い、「農」の本質活用を通じた総合学習をおこなう場として存続させることが